

北村透谷とキリスト教

――「内部生命論」の周辺――

許 培 寛

1. はじめに

二十五年の短い透谷の生涯にとって、キリスト教とは一体何であったのか。いやむしろ、宗教と文学とのかかわりが透谷の内部においては、何であったのか。近代文学の始発期における文学と「キリスト教」という、この与えられたテーマの含む一切の問題を、彼は一身に体現していた。しかし、その矛盾は深い。これを解くことはたやすいことではないのであろう。この矛盾というものを理解するためには、例えば、しばしば指摘されるような透谷におけるキリスト教信仰より汎神論的思想への転回というような単一なる図式を捨てて、その作品の本文の一語一句をあらためて、読みなおす作業を必要としている。そのことを通して我々はじめて、その矛盾が近代文学の始発期においていかなる意味をもっていたのか、といった文学と宗教という問題の一端をつかむことができるのではないだろうか。

戸川秋骨は一八九四（明治二七）年、透谷の死に際し、その追悼の辞のなかで「戦士・詩人・思想家」として透谷を評価した。この「戦士」という評価は、かならずしも透谷が自由民権運動に参加し、またのちにキリスト教フレンド派の平和運動に従事したことのみを指しているとは思えない。透谷は外部世界の変革に向かう戦士であるとともに、自己変革という内部の戦いにおける戦士であったからである。すなわち透谷が「戦士」であったということは、まさに外部世界と自己の変革をかけてキリスト教と格闘し、さらにはキリスト教を超えて、さまざまな信仰との戦いを敢行し、そこに倒れたことをもって言うべきであらう。

本稿は以上のような見通しの上に立つて、透谷の文学の基層をなした透谷とキリスト教のかかわりを考察することにあ

る。そしてそれを語る史料としては、『平和』及び『聖書之友雜誌』掲載のものをはじめとして四十篇を越える評論がある。⁽¹⁾特に、一九九二(明治二五)年五月『平和』に發表した「各人心宮内の秘宮」は、後の「内部生命論」にもつながる、彼の思想の核心をしめすものといえよう。その点からいっても透谷とキリスト教とのかわりを明らかにすることは、きわめて重要なテーマであることはいうまでもない。

そこでそれら評論にみられる透谷とキリスト教の分析に入ってゆこうと思うのだが、その前提として、その背景となるところの、彼をキリスト教と結びつける上で決定的であつたミナとの出会いと結婚、それと密接にからまるキリスト教入信の過程からまず考えてみたい。

2. 入信と結婚

透谷が最初にキリスト教に接したのは、一八八二(明治一五)年、山梨県において近藤喜則がキリスト教主義を加味して経営していた私塾蒙軒学舎に入塾した時であろうと言われているが、⁽²⁾確認することはできない。透谷が自ら書き記したものによつてキリスト教とのかわりを推定すると、石坂ミナとの恋愛を契機としたキリスト教との出会いといった、入信以前の経歴、すなわち信仰の前史ともいふべき時期が存在する。それは、一八八七(明治二〇)年八月一八日付で石坂ミナに宛てた自己の経歴の紹介を含む書簡によると、次のようなものであつた。

翌十七年は生をして一度び怯懦なる畏懼心を脱却して、再びアンビションの少年火を燃え盛らしむるの歳にてありし、此時のアンビションは前日の其れとは全く別物にして、名利を貪らんとするの念慮は全く消え、憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家となりて、己れの一身を苦しめ、万民の爲めに大に計る所あらんと熱心に企て起しけり、己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に尽力せんと望めり、⁽³⁾

冒頭の「翌十七年」は明治一七(一八八四)年であり、勝本清一郎氏の透谷年譜によれば、「少年透谷の政治へのアンビションは再び最高潮に達した」⁽⁴⁾年である。その明治一七年というのは、透谷にとっては、その前年に当たる明治一六

年頃から八王子の少壮政客大矢正夫と知りあって、三多摩地方の自由民権運動に参加し始めたのだが、同年九月になると、東京専門学校政治科に入学し、「日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居けり」と自ら記しているように、しばらく沈潜する時期をへて、またあらためて政治熱が昂揚するといった激しい動揺期であった。このような時期をおくる少年透谷にとってキリスト教とは、何よりもまず、「己れの一身を苦しめ、万民の為に大に計る所」のあるという自己犠牲による万民救済の思想として捉えられるものであった。このような一種の社会正義を実現するために自己犠牲を果たした聖者と認識されるキリスト像、あるいはそのような救世主像の上に立つキリスト教という理解は、その後、朝鮮革命計画⁶を契機とする政治運動からの決別をへて、やがて石坂ミナとの恋愛を契機として入信を決意したあとにもひきつがれている。すなわち、それは一八八七（明治二〇）年二月一日付ミナ宛の書簡のなかにある、「蓋し未来の結果を想像する時は、再びのあの洪水を来たすから然らざればあまたのくりすつとを出すにあらざれば、到底社界の破滅を免れざらん」という言葉に明らかである。

勝本清一郎氏は「透谷の宗教思想」の中で、「キリスト教的終末観としては、透谷が社会の救済を一応『あまたのくりすつ』の出現に期待している点など、全くおかしい⁸」として、透谷自身が「あまたのくりすつ」の一人たらんと思ったのかも知れないが、「あまたのくりすつ」とは、たとえば『新約聖書』の「マルコによる福音書」一三章二三節にある「にせキリストたちや、にせ予言者たち」を指しているから、唯一者キリストを信ずるキリスト教信仰からいつて誤っており、「少年透谷のキリストきどりや数多のキリストの期待にも、物の見詰めかたにやはりまだあやふやな甘さがある⁹」と言っている。しかし、「あまたのくりすつ」という観念は、透谷が社会正義的な心情をキリストのうちに投影すること、みずからが理想とする社会正義の実現を主体的に担おうとした熱烈な心情が幻想するイメージであった。したがってそれは、聖書に関する教義上の知識にもとづいて、あたかも冷静な宗教学者ぶって記したものでは決してない。このような心情は、のちの肉面的なキリスト教理解と一見異なるようでありながら、キリスト教を教義的な定形化した思想とするのを拒否して、自由かつ主体的にキリスト教を内在化せんとする透谷のありかたにおいて、共通しているとみるべきではなからうか。

このような社会正義的なキリスト教との出会いを前史として、透谷はキリスト教の核心である信仰の問題に遭遇する。先に透谷が参加して、のちに挫折した三多摩地方の自由民権運動の指導者に石坂昌孝がおり、その長男公歴が透谷の友人であったこともあって、その長女ミナと一八八五（明治一八）年の夏に知りあった。透谷とミナに恋愛関係が生じたのは

一八八七（明治二〇）年七月である。ミナはその月に横浜のミッション・スクールである共立女学校和漢学科を卒業したばかりであり、すでに日本基督教会に属する横浜海岸教会の会員であつた。⁽¹⁰⁾ミナ宛の透谷の書簡にキリスト教に関する文字が出てくる最初は、先に引用した「己れの身を宗教上のキリストの如くに」というものであるが、この年の八月二一日の夜、草したと考えられる（「北村門太郎の」一生中最も惨憺たる一週間）という手記に、入信の経過の一部分が記されている。それによると、ミナは当時、すでに平野友輔という許婚者があつたためか、透谷のほうから恋愛を断念しようとし、その時にキリスト教に入信する決意が生じたのであつた。というのは、この手記に「余は明治二十年八月二一日迄は不信心者の一人なり」「余は凡夫の一疾病者なり、嬢は真神の庭に生長する葡萄の美果なり」「此夜、余は横浜に趣きつ、益此斷行の功果ありしを發見せり、余は又た是より真神の功德を感じ出せり、是より真神の忠義なる臣下たらん事をも決意せり」といったミナへの思慕と結びついて入信を決意した言葉がみえるからである。

翌一八八八（明治二一）年一月二一日付のミナ宛の透谷の書簡にも「余は神の意に従つて生命を決す可し、余は余の心を清めて神の命令を受け入れたり、今や余は全く神の子たるを信す」とあるのだが、このように入信がミナへの恋愛感情という情意的な問題と相伴つて起こっているということは、透谷の信仰が西欧文物へのあこがれとか、教養主義的な性向というよりも、多分に情意的要素を持つていることを表している。しかしだからといって、透谷の信仰が恋愛感情の代償行為としての偽物であるということにはならない。人にはさまざまな入信の動機や経路があり、また信仰の理解や論理は多様であつて、それを一定の枠に押しこめようとすることはキリスト教の理解にはならない。キリスト教がなんであるかについては無数ともいふべき見解があるが、どれが正しい信仰かということは客観的には断定することができないからである。

またこの入信直後の透谷が書簡や評論などにそれ以後の時期にくらべて「神」という言葉を多く使っていることは事実である。それが笹淵友一氏の言う「福音的信仰時代」⁽¹³⁾の一つの根拠になつているのであろう。しかし、ここで言われている「神」は、恋愛とその挫折を経て、ふたたび新たな人間関係を回復しようとしたなかで透谷が初めて見た他者であり、また新しい自己であつたといつてよからう。そうみられる以上、この時期には絶対者としての神への信仰があり、のちにそれが内面化し、自己同一化して行つたというような、「福音的信仰」をかれのなかにみる必要はなからう。入信直後の透谷にとつては、「神」という言葉が新鮮なものとして受け取られ、思索化されているという特徴がみられる。それは一

つの明確な神学思想の告白にもとづくといったものではない。のちに「神」という言葉がそれほど用いられなくなっても、かれの信仰がそれほど変化したとは言えないだろう。ここに透谷の信仰や思想の特色がある。

この年の春三月四日に透谷は牧師田村直臣から洗礼を受けて数寄屋橋教会に入会した。透谷がこの教会を選んだのは、弥左衛門町の自宅から近かったということが最大の理由であろう。田村師は当時、アメリカから帰朝した欧化主義者であり、教会には学生が多く集まってきたが、そのなかには政治家もいて、かれの布教活動が魅力のあるものであったことは確かである。だが牧師にも教会にも正義感と内面性を要求する傾向のあった透谷には不調和を感じさせるところがあったようである。受洗後、間もない三月二三日にミナの父親の石坂昌孝宛の書簡の中に、「然し生の常にうらやむはクリスト教の手合なり、彼等は決していねむりせず、後來、ぢよふぶな人間になるでせふ、たのもしや⁽¹⁴⁾」という言葉が見えるが、ここには透谷一流のシニシズムがすでに教会の授けるクリスト教に対して向けられていたことが表れている。この年の十一月三日、透谷は数寄屋橋教会において田村師の司式によってミナと結婚式を挙げた。時に透谷一九歳、ミナ二三歳であった。

3. 宣教師との接触

透谷のクリスト教信仰を具体的に跡づけるためには、彼が接触した伝道者達を調査する必要がある。透谷が宣教師と最初の交渉があったのは、加奈多メソヂスト派の宣教師イビーであった。彼は一八七六(明治九)年に来日し、一八八三(明治十六)年から毎土曜日厚生館でイヴィング、デキソン等と共に「東京演説」なる布教活動をおこし、クリスト教を科学的に説明して、主として教養ある人々に伝道した。ミナの語るところでは、透谷がイビーの助手になったのは結婚前の一八八七(明治二十)年頃からという。その仕事はかれの説教の翻訳であるが、透谷は速記ができるところから説教の下書もやっていたらしい。またイビーに日本語を教えてもいたようである。なお透谷とイビーとの接触は、透谷と同藩で、イビーの「東京演説」を翻訳しかつその出版名義人になった堀江景宣の周旋によるのではないかと記憶していると桜井明石はいつている。明石が透谷と知り合ったのもイビー方であった。当時、明石はメソヂスト派の信者であった。

やがて、透谷が普連土教会に接近したのはヴレスウェイトとの関係が生じてから始まる。ヴレスウェイトは、姉のメ

リー・シー・ヴレスウエートが赤坂病院を経営していたドクトル・ホイットニーの夫人として来日していたという事情もあり、さらに彼の父のジェー・ビバン・ヴレスウエートが英国聖書会社の委員であったので、英国聖書会社の代理人として一八八六（明治十九）年に来日したのだが、このような縁故があつて、同じく来日したのであつた。ヴレスウエート自身、英国フレンド派の正統派に属し、既に一年前に来日していたコサンドの協力者として同派の伝道にも努力した。一八八九（明治二二年）ヴレスウエートは新聞紙上に翻訳者募集の広告を出したが、透谷はこの試験に応じて合格したのであつた。ヴレスウエートはこの時普連土派の信者二・三名に試験委員を依頼したのだが、勝本清一郎氏によれば試験委員中には普連土女学校校長海部忠蔵もいた。¹⁶⁾このことが透谷と普連土教会との間につながりができた最初である。その時期が秋ないしそれ以前であるだろうことは勝本氏が述べておられるとおりである。

ヴレスウエートは、桜井明石の言葉によれば、「温良恭謙の君子人」¹⁶⁾であり、透谷もそれを知っていた。透谷はヴレスウエートのもとで翻訳に従事したが、ヴレスウエートが『佐倉義民伝』の英訳にとりかかっていたのでそれに協力している。そのほかではヴレスウエートが茨城県の水戸伝道にたずさわったのでそれにも同道した。このような布教活動に協力している間に、かれを通して透谷はコサンドやホイットニーと知り合い、更に普連土教会、普連土女学校にも関係するようになった。なおヴレスウエートのもとで、その翻訳、通訳の仕事が、いつごろまで続いたかは分らない。

コサンドはフレンド派最初の宣教師として、ヴレスウエートより一年前、一八八五（明治一八年）十二月一日フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道教会から派遣されて来日した。そして翌年早々には、東京で伝道やキリスト教系の教育事業に着手し、彼の手によって女学校、教会等が相次いで設立された。同派の伝道地としては、東京以外では茨城県下が主な伝道地であり、特に水戸伝道が最も早かつた。透谷がコサンドのもとで翻訳、通訳に従ったのはヴレスウエートの助手になってから間もなくのことであろう。その仕事は一八九二（明治二五年）年一月まで続いたが、免職ということで終わっている。その免職の理由は、『基督教新聞』に掲載された「普連土教会報告」によれば、コサンドの帰国のためであつたと思われる。¹⁷⁾

透谷がヴレスウエート、コサンド等の助手として布教活動に協力した動機は、第一に生活問題にあつたことは疑いないが、しかし単なる翻訳者以上に、キリスト教の伝道に対する積極的関心があつたことも事実であろう。透谷の通訳ぶりについて、勝本氏は石塚伊吉の興味ある直話を紹介している。彼は演壇の上でよく着流しのまま懷手をして宣教師の説教の

内容とは全く違った彼自身の思想を語って、宣教師が事前に透谷と説教内容の打合せをしても、通訳とは全くいえない彼自身の演説をやつてのけて宣教師を困らせたという。

現在東京の堀越家に水戸伝道の記念写真が二枚残っている。一枚はコサンド、モリス夫妻、ミス・ヘーンズ及び板垣母子と共に透谷が写ったものである。ウイスター・モリス、メリー・モリス、メリー・エム・ヘーンズの三名はフレンド婦人外国伝道教会を代表して一八九〇（明治二三）年来日し、四月三日には外国伝道委員会に出席したことがわかっている。また板垣は水戸の信者である。このような事実から、この写真は来日当時の視察をかねた水戸伝道の記念写真であろうと思われる。写真には透谷の手で各人の名が記されているが、ミス・ヘーンズだけ Miss と書いたままで名前がないのは来日当時でまだその名前を知らなかったからであろう。他の一枚は水戸市上市の写真師鈴木広二撮影のもので、外人はヴレスウェイト、もう一人の日本人は加藤万治である。この写真については詳しいことはわからないが、前の写真よりやや後のもので、勝本氏は明治二四年春頃撮影されたものと推定している⁽¹⁸⁾。いずれも透谷の小壮期の姿を伝える貴重な資料となっている。

ヴレスウェイトの義兄、ドクトル・ホイットニーは、一八七三（明治六）年来日して日本の教育事業に貢献したウィリアム・シー・ホイットニーの長男で、二十歳の時父に伴われて来日した。東京大学医学部の最初の留学生として医学を研究し、後に赤坂病院を経営して貧窮者の治療に当り、また海軍医学にも貢献した。ホイットニー家は、両親の家系のいづれからもキリスト教の伝道者を出していることからわかるように、篤信の家族で、プレスビテリアンの教会に属していた。ドクトル・ホイットニー自身も幼年時代から聖書を愛読する敬虔な信仰の持主であった。平信徒ながら福音会という伝導組織を設けて日本の上流知識人社会に伝道を行い、また布教雑誌『聖書之友雑誌』を刊行して文書伝道も行った。

透谷はヴレスウェイトから紹介されて同誌の編集者になった。その時期は、彼が麻布の某所―透谷の日記によれば麻布簞笥町四番地である―に住んでいた頃であったと、同誌に毎号翻訳を出していたと平田禿木は「文学界前後」¹⁹に述べているが、更に正確な、その期間は、勝本清一郎氏によれば、一八九三（明治二六）年三月末から十月までである。

透谷が数寄屋橋教会から基督教会に転会したのは、正式には、数寄屋橋教会の「入会名前」によれば、明治二六年四月九日である。しかし基督教会との事実上の関係はもっと早くから始まっていた。それが宣教師の通訳やその日本語家庭教師という職業上の交渉から始まったことも普通土教会の場合と同じである。『麻布基督教会の五十年』所収の北村美那子

の追憶によれば、透谷と同教会との関係は、同派の宣教師ウドウォースの来日直後同人の日本語家庭教師になったのが初めてであり、ウドウォースの来日は一八九二（明治二五）年十月であった。しかし透谷と同教会との交渉はミナの述べる時期よりも、もっと早くはじまっており、同年三月頃には既に透谷は基督教教会初代の宣教師ジョーンズの通訳を勤めている。右書に収められる生江孝之の「ジョーンズ宣教師の思い出」によれば、明治二年四月から二四年末頃までの同宣教師の通訳は生江であり、彼の前には太田敏夫が、後には長野某が臨時に通訳をつとめていた。生江の直話によれば、彼在職中には透谷と教会との関係は生じていなかったという。以上の事実から、透谷がジョーンズの通訳になったのは一八九二（明治二五）年初頃、臨時雇であった長野に代わつたものと推測される。同年三月十七日には透谷は、まだあまり親しくなかったであろうジョーンズに同道して東北伝道に出かけている。しかしジョーンズとの交渉がミナの記憶に残っていないところから見ても、二人の関係はそう深くはなかったであろう。

透谷はイビー以来このように多くの宣教師と交渉を持ったが、彼らに対してどのような態度を持っていたのであろうか。宣教師の中にはイビーのような相当の学者もいた。イビーは「東京演説」によって母校のヴィクトリア大学で神学博士の学位を得た人物である。透谷が彼を「イビー先生」と書いているところを見れば、相当に尊敬していたらしい。しかし、それ以外には人物、識見によって透谷を心服せしめるものは少なかったようである。むしろどうやら透谷は宣教師に対して尊敬を払わなかったとみられるふしがある。尤も来日した宣教師の能力に対する批判は、当時の日本の教会の一般的傾向であって、外国ミッションからの独立の機運さえ一部の教会に起こっていた。宣教師としての資質の点で問題があったようで、このような事情も考慮に入れる必要がある。

4. キリスト教に対する批判精神

一八九三（明治二六）年四月九日に透谷とミナはそろって数寄屋橋教会に転会した。数寄屋橋教会は日本キリスト教会というジャン・カルヴァン流正統主義の伝統につらなるプレスビテリアン（長老派）に属し、麻布クリスチャン教会に所属していた。この教会は、一九世紀に米国開拓民の間に起こった原始教会復帰運動に端を発し、牧師制度や神学教義をもたず、会衆の自治によって伝道していた教派で、チャーチ・オブ・クライスト（キリストの教会）やデイサイプル派と同

系統のものである。日本には一八八七（明治二〇）年五月に同派の宣教師ダヴィッド・F・ジョンズが米国から来日、最初、宮城県石巻で伝道し、のち東京に進出、一八八九（明治二二）年二月に麻布飯倉に麻布クリスチャン教会を設立したのである。透谷は一八九二（明治二五）年一月にジョンズの通訳になり、この教会の通訳兼伝道師であった太田敏夫と親交を結んだ。このような関係で正式の転会となったものと考えられる。

数寄屋橋教会での洗礼入会は、すでにふれたように、家と教会とが地理的に近かったということ以外に、たとえば最初透谷は福音主義的信仰を持っていたからというような理由は見出せないけれど、しかし麻布クリスチャン教会への転会には、経済的な関係以上に、制度的・教義的クリスト教に対する批判と、その一方に原初的といつてもよいような、いわば魂から内発する信仰の希求という必然性が見られるように思う。というのは、透谷がこの教会に熱心であつて、毎日曜日の朝、『旧約聖書』の「詩篇」の講義を担当したことからも窺われるからである。

しかし、この麻布教会期の透谷の思想に関してやや不可解なことがあるとすれば、かれが『聖書之友雑誌』の編集者となつて同誌に起稿し始めたクリスト教関係の文章が、それまでの透谷の思想からは考え難いほどにきわめて正統主義的であることである。たとえば一八九三（明治二六）年四月の同誌第六四号に載った「恒になんちの神を仰ぐべし」には、次のような文章が見られる。

神を仰ぐとは、神の命令に服膺するの謂なり。神が吾人に命ずることある時に、之を謹んで成すの謂なり。吾人は、覚性を以て、心を以て、すべて吾人の有するところを以て、神を仰がざるべからず。（中略）先づ主を迎ふるの準備を整へ、彼に謂ふに、凡て吾等の中に彼を迎ふるに適はざるものあらば之を取去り主はん事を以てせざるべからず。言を換て之を説けば、凡てのものを捧げて主を迎へざるべからず。吾等の五²²林も何かあらん。吾等の才能も何かあらん。吾等の財宝も何かあらん。すべてを空しくして而して主に事ふるにあらざれば不可なり。

ここにはクリスト者として何の変哲もない信仰告白があるだけだが、同種の文章が以後、一八九三（明治二六）年十月下旬に編集者を解任されるまで毎月、数篇ずつ掲載されることになる。これが透谷自身から内発する思想ではなく、職業上、他から律せられたものであるらしいことは、この「恒になんちの神を仰ぐべし」の終りに近く、「これ即ち、我が聖

書の友が恒に守るべき道なり。吾人は日本の基督教会が此方向に進まんと望む。人の神にありての成功の秘訣は爰に存す、といふも過言にあらざるなり」とあるところからも推測される。勝本清一郎氏はこれら『聖書之友雑誌』の文章のほとんどが無署名であるところから、岩波書店刊『透谷全集』の編纂に当たって、厳密な本文批判を行い、透谷の作か否かを判定しているが、その結論として、これらを透谷の述作と認定した上で、その述作の姿勢について「恒になんちの神を仰ぐべし」の解題のなかで、「ホイトニイやその他の『聖書之友』運動の首脳者たちから、あらかじめ英語の種本を渡されて、それを翻訳または翻案することを命じられた場合の述作も多いかも知れない」と推測している⁽²³⁾。

少なくともこの文章の紙背に読み取れるのは、透谷独自の思想や信仰ではなく、むしろ生活や職業のために妥協せざるをえなかった透谷の内心の呻吟である。それがのちの編集者解任となって現れると見てよいであろうが、それはまた同じ時期に他の雑誌に発表したもの、それらとまったく異なる透谷独自の思想が表白されていることから明らかであろう。たとえば一八九三（明治二六）年五月の『平和』第一二号の「復讐・戦争・自殺」には次のような鮮烈な思想がのべられている。

然れども宗教は架空の囁言たらしむべからず、無暗に唯だ救とか天国とか浮かれ迷はしむべからず。宗教はクリード（信仰個条）にあらざるなり、宗教は聖餐にあらざ、洗礼にもあらざ、但しは、法則にも、誠命にもあらざるなり、赤心の悔改と赤心の信仰とは、いかなる場合に於ても尤も大なる宗教なり。而して宗教はヒューマニチーの深奥に向つて寛々たる明燈たるべきものなり。人生実に測るべからざるものあり、人生実に知るべからざるものあり。願くは吾等信仰をして皮相の迷信たらしめず、深く人間と神との間に、成立たしめんことを。

ここにみえる「赤心の悔改」「赤心の信仰」とある「赤心」には制度や儀式、さらには教義を超えて、直接に「神」と向かい合ふとする透谷の熱情があふれており、その「赤心」があつて始めて、「深く人間と神との間」の信仰が成立するという思想が認められる。したがって信仰とは、「ヒューマニチーの深奥」と呼ばれるように、「神」によって反照されるところの人間性の深奥（「赤心」）そのものという思想が示されるわけである。この信仰に関する透谷の思想は注目されてよからう。というのは、透谷は「宗教」をテーマとして語る場合も、「神」についてふれることはほとんどない。それ

よりもむしろ、信仰とは結局のところ、「神」と対峙するところの人間性の問題という捉えかたをしているからである。すなわち「神」よりも信仰（人間性の根源）にこそかれの関心があったのである。この人間性の根源を表すのに透谷はやがて、キリスト教信仰という限定を超えて、「神」（キリスト）を対他的存在とすることのない「生命」あるいは「内部生命」の語をもって語るようになってゆくのである。

「内部生命論」は、透谷晩年の思想の結晶であり、かれの宗教観が基盤となつて、豊かに展開した透谷思想の核心となる言葉であるということには異論はあるまい。一八九三（明治二六）年、『文学界』の第五号に発表した「内部生命論」には次のようにあることから、それが本来、すぐれて信仰の問題であることがみてとれよう。

詩人哲学者は到底人間の内部の生命を解釈するものたるに外ならざるなり、而して人間の内部の生命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざることを信ぜずんばあらざるなり、人間のヒューマニチー即ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は、即ち爰に存するなるを信ぜずんばあらざるなり。生命²⁵ 此語の中にいばかり深奥なる意味を含むよ。宗教の泉源は爰にあり、之なくして教あるはなし、之なくして道あるはなし。之なくして法あるはなし。

このなかで透谷はまず、「詩人哲学者」を規定するのに、その存在を「内部の生命」と関わらせる。それは、はしなくも「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したにすぎない。大切なことはしかしそれを変えることである」と言つたカール・マルクスを連想させるといつてよいかもしれない。マルクスにおいては、なによりも世界の「解釈」ではなく、世界を「変える」実践に価値を置いたのだが、透谷は、その「内部の生命」に対しては、「解釈」よりもむしろそれをそれとして成り立たせるところの「信仰」の価値を説くところがマルクスと異なるう。しかしここにみえる「宗教」はすでにキリスト教に限定されてはいない。キリスト教を超越した、ある普遍性を意味するようになっていくはずだ。透谷はヨーロッパ式の正当主義キリスト教的な観念のみを信ずることを排している。これが、「人間の自造的のものならざることを信」ずる「ヒューマニチー」（ヒューマニズム）であるというところで、透谷の信仰の本質というものが表わされている。したがって透谷にとつて「内部の生命」とは、つまり人間と「神」（普遍的絶対者）との関係において「神」と対峙するところの人間の普遍性の問題であつたのである。このような意味において、それは人間性の根源を指す言葉である。

同年九月に『評論』第一二号に発表された「情熱」ではこのような認識はいっそう自覚化される。すなわち「信仰」や「宗教」の概念はさらに普遍化されて、「大なる詩人には必ず一種の信仰あり、必ず一種の宗教あり⁽²⁶⁾」として、ホメロス、シェイクスピア、西行、芭蕉といった文学者の詩心に「信仰」や「宗教」を重ねてゆくのである。そして「凡ての儀式と凡ての形式とを離れて立てる宗教なればなり。彼等の宗教的観念は具体的なるを得ざるも、之を以て宗教なしと言ふは、宗教の何物たるを知らざる論者の見なり⁽²⁷⁾」というところまで概念は拡張される。透谷思想にとって「宗教」がこのように普遍化される過程において、その対他的な存在として「文学」が浮上してきたのである。透谷の「文学」とはこのようなかたちで自覚化されてきたわけである。かれにおいて宗教と文学とは混同されることはないが、「宗教」の概念の拡張の先に「文学」がたちあらわれたのであった。しかし文学についてはひとまず置いておこう。ともかくも、「宗教」は情熱をおこす一大要素であり、是非と善惡とを弁別する最大の力であるとして、「あはれむべき利己の精神によって偷生する人間を覚醒して、物類相愛の妙理を覷ぜしめ、人類相互の關係を悟らしむるもの、宗教の力にあらずして何ぞや⁽²⁸⁾」という。

このように透谷の「宗教」が既成の宗教の概念にとらわれない普遍的なものへと昇華されていることは明らかであるが、しかし厳密に見た場合、このように概念の肥大化した透谷のいう信仰や宗教が信念とどのように区別され、したがって、芸術や文学とどのように相違するののかについては、なお不明な点が少なくない。それというのも、透谷の「宗教」が教理的に明確にされるものであるよりも、むしろ原初的な混沌とした生命の躍動そのものを意味しようとしていたからであった。そのことは客観的にみれば透谷の思想がユニテリアニズムに近いものとなっていることを示しているのではなからうか。このようなものが「内部生命論」の基層となる「宗教」の意味するところであった。ただ以上のような透谷の思想の始発にキリスト教信仰との葛藤があったことはあらためて指摘しておかねばならない。

一八九三(明治二六)年十月下旬に『聖書之友雑誌』編集者を解任された。同年十一月一日の日記に「即ち先月を以て、『聖書之友』編集の任を解かれ、引続き教会の方にも苦情出で、牧師としての太田君に対する反動起り、従って余も亦た辞し去らざるべからざるに到れり、余は之を以て機会なりとす⁽²⁹⁾」と記されている。その原因は、勝本清一郎氏によれば、『聖書之友雑誌』は超宗教的な性格を持ち、出資者はクエーカーに属していたが、読者の大多数は正統主義的であったためだという。そしてこのことを透谷の思想と結びつけて、「透谷の正統的ならざる思想や、誌上にそれがとかく現れて、

正統的なものが現れない編集に、苦情を言う周囲の声が次第に大きくなつたであろうことは考えられる」と指摘する。⁽³⁰⁾
『聖書之友雑誌』における透谷の文章が、正統主義に対して妥協していたことはすでにふれておいたが、しかしその努力にもかかわらず、透谷の寄稿には次第に透谷的な思想も現れてきた事実を知る時に了解されるであろう。編集者を解任される直前、『聖書之友雑誌』第七十号に、北村門太郎の署名で書かれた「心の経験」には次のように透谷の思想が明示されている。

吾人の基督教を信ずるや、往々にして唯だ其の教理、教法の微妙なるに驚嘆することを知りて、而して靈魂の問題に至りては甚だ冷やかなるが如きを覚ゆ。基督を信ずるの前に知らざるべからざる事は、心の存在にして、而して心の存在と共に知らざるべからざることは、心の経験なり。心は実に人間の神聖なる枢府なり。その経験はすべての知識の中の知識なり。凡そ人、心の知覚なくして、神の知覚あるはなし、況や救主の知覚をや。詩人にして心の知覚完からざるものは、その歌ふ所、ヒューマニチーに近き能はず。聖人にして心の知覚乏しきものは、真に人間を率ゆるものにあらず。基督信徒の一生は、実に心の経験の繰返しにして、能く神に事ふるものは、能く心の経験に聴くものなり。⁽³¹⁾

ここにみえる「ヒューマニチー」の思想には従来、布教誌とは別個の『平和』に発表してきた文章となんら異なるところがないような、透谷自身の思想がある。ちなみにこの号には、他に無署名ではあるが、透谷筆と考えられる文章「主の招き」「如何に与ふ可きや」「神を畏るる事」などもあって、そこには従来通り正統主義的な思想が表われている。「心の経験」が『聖書之友雑誌』のなかでは他に一例しかない透谷の署名入りであることからいって、透谷がある種の覚悟をもって、あえて草した一文というように受けとられる。

ともあれ、この時、透谷は氣に染まない職業を辞して、人生の岐路に立った。さきに引用した十一月一日のかれの日記には、前の引用文に続いて次のように書かれている。

則ち断然、從來三年間執着せし宗教的生涯を打破し、之より大に我が意志を貫くべし、われ多艱なる過去を通り来れり。この頑骨を枉げて、面白からぬ仕事に追ひつかはれたり、看よ、之よりの余が猛志を、「エマルソン」を脱稿するの後、直ちに「公暁」に取菟らんか。⁽³²⁾

かつて一八九二（明治二五）年一月十五日の日記に、コーサンドの通訳を辞するに当たって「ぬらぬらとからをはなれた蝸牛」と記して、文壇に躍り出ようと考えた透谷は、しかしまた生計のために他の宣教師の通訳を勤めたり、布教雑誌の編集に雇われたりして、容易に「から」を離れることはできなかった。それにはいまひとつの理由が重なる。すなわちかれ自身にも、宣教師の通訳をしたり、教会で聖書講義をしたり、東北地方に伝道旅行したりして、自ら伝道者たらんと「宗教的生涯」に執着したこともあったのである。しかし、わけてもこの二、三年の歳月にあまたの詩や評論を執筆し、世に問うてきた透谷はすでに文学者としての自負も充分にあったであろう。折から、その評伝の筆を執り始めたラルフ・ワルド・エマソンは、最初、牧師として講壇に立ち、洗礼聖餐を司っていたが、その教義儀式に疑問を覚え、決然として伝道者たることを辞し、文学者・評論家・哲人として警世の書を著わし、また超絶主義を唱えて、既成宗教を越える道を歩んだ人物であった。透谷が自らの行路を照らす炬火としてこの人物の生き方に影響されなければならなかった。「エマソンは凡て彼を崇拜する者のエマルソンなり。余は其中の一人なるのみ」という冒頭の句がそのことを雄弁に物語っている。

5. むすび

透谷のキリスト教との葛藤、あるいはキリスト教の内部においての自己実現のための戦いに際してみられるその深刻さと鋭利性は、透谷をたやすくキリスト者と称して疑わぬ安易な見解を拒絶するものがある。透谷の友人であった島崎藤村がのちに透谷を評して語った言葉、「その惨憺とした戦ひの跡には拾つても拾つても尽きないやうな光った形見が残った」にある、「光った形見」を「キリスト教」や「信仰」という定形の概念に置き換えるべきではないだろう。それは無形の「形見」であり、それゆえに今も光り続けるものなのである。従来「キリスト者透谷」という定式化された呼称はその内実を再検討すべきではないだろうか。本稿はこのような課題の一端を担うものである。

透谷における「内部生命」なるものをキリスト教だけで解釈しようとすることはこの言葉の持つ意味を矮小化することになるだろう。透谷の信仰はその回心、入信の当初から、いわゆる正統的、福音的なものでなく、不定型のものであった。むしろ異端的、もっと正確に言えば正統と異端の区別の自覚を持たない原初的な異端ともいえるべきものであったのではな

いだろうか。この原初的で混沌としたところに真の「内部生命」の意味が隠されていると言えよう。透谷におけるこのような矛盾、欠落を突いて、我々は彼のキリスト教信仰の内実に、多くの批評を加えることができよう。然しまた反面、我々が透谷の生涯に聴くべきものは、彼がこのような矛盾を引きずりつつ、なおキリスト教信仰から汲み尽くそうとした、そのかけがえのない何ものである。透谷の文学を「可能性の文学」と呼ぶことは、肯定的にも否定的にもできるであろう。我々はただ今日の自身を賭けて、彼から何ものかを汲みつくすほかはない。

注 釈

- (1) 『平和』が日本平和会機関雑誌として一八九二（明治二五）年三月五日に第一号創刊されるにあたり、透谷はその編集者、主筆に就任。『平和』に載せられた評論は「平和発行之辞」をはじめ二九篇である。また『聖書之友雑誌』では一八九三年三月から編集者に就任。この雑誌に載せられた評論は「今日の基督教文学」をはじめ一六篇である。
- (2) 勝本清一朗氏の透谷年譜による。「この年の五月以前または秋になってから、山梨縣南巨摩郡睦合村南部において、近藤喜則が経営していたキリスト教主義を加味し、英・漢・数の私塾・蒙軒学舎に入塾」（勝本清一朗編『透谷全集』第三卷、岩波書店、昭和三〇年所収、五八五頁）
- (3) 『透谷全集』第三卷、一六七～一六八頁
- (4) 注（3）引用書、五八九頁
- (5) ミナ宛書簡、一八八七（明治二〇）年八月一日付、注（3）引用書所収、一六七頁
- (6) 日本の民権家が朝鮮で当時の専制政府を転覆し、朝鮮の民権家と協力して民主政府をつくり、その余勢を駆って日本でも革命を起こそうとする計画。
- (7) 注（3）引用書、一九一頁
- (8) 日本文学研究資料叢書『北村透谷』有精堂、昭和四七、五〇頁
- (9) 注（8）引用書、同頁
- (10) 「明治三年六月一日田村牧師より受洗入会

会員門太郎妻

横濱海岸教会より証書を以て入会、

北村みな」(注(3) 引用書所収、五四四頁)

(11) 注(3) 引用書、一七〇―一七三頁

(12) 注(3) 引用書、二〇二頁

(13) 笹淵氏は透谷の宗教的環境について三期に分けて見ている。第一期は明治二〇年以前のまだキリスト教を知らなかった無信仰の時期であり、第二期は明治二〇年から二三・四年に及ぶ時期で正統的、福音的信仰時代である。第三期は明治二五・六年、すなわち透谷の文壇的活動の主な時期に当たるが、氏はこの期の信仰的特色を神秘的、生命的であるとしている。笹淵友一著『文学界』とその時代・上』明治書院、昭和三四、一三二―一三三頁

(14) 注(3) 引用書、二〇八頁

(15) 注(3) 引用書、六〇三頁

(16) 桜井明石「透谷子を追懐す」、注(8) 引用書所収、二八九頁

(17) 四五号、明治二五年三月一八日の記事に「伝教師コサンド氏夫妻は当一月一時帰国せられたるにより不在中ドクトル、ホイットニー氏出席して熱心に働かれ大に会員の信仰を動かせり」とある。

(18) 注(3) 引用書、五五〇頁

(19) 注(3) 引用書、六一六―六一七頁

(20) 勝本清一朗氏の透谷年譜にもみられる。注(3) 引用書、六一六頁

(21) 透谷年譜によれば、生江は、透谷は彼の後を受けてジョーンスズの通訳に就職したと述べている。

(22) 注(3) 引用書、二八三―二八四頁

(23) 注(3) 引用書、六八三―六八四頁

(24) 『透谷全集』第二巻、岩波書店、昭和二五、二〇六頁

(25) 注(25) 引用書、二四六頁

(26) 注(25) 引用書、二九九頁

(27) 注(25) 引用書、同頁

(28) 注(25) 引用書、三〇〇頁

- (29) 注(3) 引用書、二七一頁
 (30) 注(3) 引用書、六八二頁
 (31) 注(25) 引用書、三三二頁
 (32) 注(3) 引用書、二七一頁